

風の末裔シリーズ・4thシーズンの6

～風露の谷(ふうろのたに)～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

蒼の里より十数里、東に離れた深山地帯。

針葉樹の森の切り立った深い谷に、一つの部落があった。と
いっても、谷底の部落ではない。彼らは空中を住処とする。

この辺りは太古の地殻変動で、地層が縦に走る。柔らかい地
層が侵蝕されて固い地層が残り、数十メートルの天然の塔が幾
つもそそり立つ、不思議な光景を作っていた。

塔の一つ一つのでっぺんに、一軒づつの、石で出来た住い。

塔と塔の間はツタを編んだ太いロープが渡され、一番山に近い
塔から、山の斜面に水平に梯子が掛けられている。

今、その梯子を歩いて、一人の蒼の妖精が、部落の入り口に
差し掛かっていた。

「お止まり下さい。風露(ふうろう)の谷に用がお有りか？」

梯子の先の崖の上は閑になっていて、石積みの小屋の大窓か
ら、紫の髪の番人が呼び止める。

外来者はここを通過しないと、部落の者と接触出来ない。そ
れだけこの部落には、守らなければならないモノがある…、と
いう事。

「ラウ老師にお繋ぎ頂けるか？ 風の末裔の使者、ナーガ・ラ
クシヤが訪ねて来た」と

「風の末裔の…ああ、はあ…」

関所の番人は、受付カウンターにもなっている大窓から、首
を伸ばして山の斜面を見た。深緑の草の馬が、足場の悪い木々
の間で、居心地悪そうにこちらを見ている。

草の馬で飛べば容易たやすいのに、わざわざ山側に降りて
細い梯子を渡るのは、蒼の一族が風露の民への礼節をキチン守
っている証だ。

「蒼の一族の…、ナーガ・ラクシヤ殿…」

門番は分厚い名簿を引っ張り出して、パラパラと繰った。

「最後には、いつ頃来られましたか？」

「私はここへ来るのは初めてなのです。以前はツバク口長が来
ていました。濃い紺色の癖ツモの…」

「ああ！ はいはい、ツバク口殿！ あの方ね！」

番人は頁を繰る手を止めて、にこやかな顔を上げた。

「此度(こたび)より、蒼の里よりの使いは、私が参る事となり
ました。ナーガ・ラクシヤです。お見知りおきを」

「ああ、はい、承知しました。…ツバク口殿は？ 引退にはお
早いでしょっつ〜」

「…黒死病で…」

「…ああ…」

番人はにこやかに消え、会話を切って、名簿に朱色で何か書き入れた。部落を訪ねる縁者が連ねられたその名簿は、よく見ると朱色だらけだ。皆、最近書き込まれた物だろう。

「優しい方でした。私は子供でしたが、竹細工の玩具の作り方を教えて貰いました…」

「……………」

番人は名簿から顔を上げて、部屋の奥を振り向いた。

「フウヤ、お使用だ」

部屋の隅で、小刀を持って何やら彫り物をしていた子供が、顔を上げた。番人とは違って、白っぽい猫っ毛の男の子。

(シンリィと同一年位かな?)

子供はナーガにチョコンとお辞儀して、ツタのロープに滑車の付いた木の枝を引っ掛けてぶら下がり、勢いを着けて滑って行った。

上手いもんだ…と、見惚れているナーガに、番人は熱いココ茶を勧めてくれた。

「先の災厄で、この谷を訪れる者も減りました。皆、外の顧客の安否を心配しているのですが、こちらから訪ねに出向く訳にも行きませんかからね」

「…そうですね…」

風露の谷の住民は、ほぼ外に出ない。部落外どころか、部落内の家々の間も、滅多に往き来しない。大人のお使いでツタを伝って往き来するのは、子供の役目だ。

では、部落から出ない尖塔の住民達が、どうやって暮らしているのか？ 水は長い滑車で谷から汲まれ、食料や生活必需品は関を通して外部から運び込まれる。

それらをどうやって調達するかというと、この部落の『ある特産品』と交換されるのだ。

ほとんどは個人の顧客が注文し、対価として請求された物資を持ってくるのだが、交換品は部落全体の収入として、公平に分配された。それを仕切る番人は、修行中の若者が交代で勤めている。

『特産品』を造る技術は門外不出で、外に対して厳しく秘密を守っている。だから、その技術を会得している大人達は、部落を出ないのだ。

出る…という事は、部落の財産である『技術』を外に出す事になる。それはこの心許ない部落の、存続の危機を意味する。

命じられなくとも尖塔の住民達は、部落を出ようなどとは思わなかった。皆、この部落を愛している。ここ以外で生きようなどと、頭の端にすら思い浮かばないのだ。

父のツバクロから聞いていた風露の谷の概要は、そんな所だった。自分が外交の真似事をやるようになることは思わなかったので、その時は他人事のように聞いていた。

生涯、尖塔の石の家に隠れこもって暮らすなんて……。

ナーガは、ひ弱い民に哀れを感じていた。生き物は、暮らしやすい所、便利な土地に暮らしたがる。強い者は良い土地に、弱い者は悪い土地へ追い立てられる。

こんな、水を汲むにも大仕事な、家一軒つつしか建たない、トンでもなく不便な土地へ追いやられるなんて、何て虐げられた可哀想な部族なんだろう……。

ロープを滑ってフウヤが戻って来た。

「ラウ老師が、お待ちしておりますと」

「長らくご無沙汰した非礼をお詫び申し上げます」

ナーガはまず、飾り気なしに謝った。理由は聞かれたら答えればよい。

「構いませぬ。災厄で、どこの部族も痛手を追ったと聞きますじゃ。まずは外交より、内部の立て直しが大事なものは、皆同様」

「はい……」

ラウ老師は賢明だった。こちらは何も言い訳しないで済んだ。「ツバクロ殿がお隠れになられたとは、寂しい限りです。あの

方は、本当に良き友でいて下さった。我等も深く哀悼の意を捧げましょう」

「ありがとうございます」

「貴方様はご子息か？」

「はい……、ご存知でしたか？」

「その細筆で墨を引いたような眼の縁と眉を見て、誰が他人と思ひましようか」

「……………」

老師の住居は、他の塔よりやや高見にあり、窓から遥か下を流れる河が、霧に見え隠れしていた。室内には様々な材料が立て掛けられ、工具が並んでいる。

窓の外、住居の横の僅かな土地に、草の馬が窮屈そうに立っている。許しを貰って、移動は馬で飛んだ。あのロープを滑るのは、さすがにちょっと怖い。

「ツバクロ殿も挑戦してみても、こりゃダメだと笑っておられた」
ラウ老師は懐かしそうに目を細めた。

「我等は、発注してくれる顧客以外と付き合いはせん。そんな我等と友好を結んで何の意味があるのかと訪ねたら、あの方はなんと答えたとお思いか？」

「そうですね……、多分、はっきりした答えはなかったのでは？」

「その通りですじゃ」

老人は膝を叩いて微笑んだ。

「意味がなければ友達になっちゃいけないんなら、誰とも友達になれません、だと。一本取られたと思いましたが。あの頃は初々しい若者であられた…」

「あの……」

ナーガは話題を変えようとした。

父の事を誉められるのは嬉しいが、失った穴に苦しむ身にしたら、この話題が長いと、ちょっと辛い。

「この部落の技術は門外不出と聞きました。私を招き入れるにあたって、道具や材料を仕舞っておくだろうと思っていたのですが…、こんなに曝(さら)して良いのですか？」

「ああ……」

老人は細い目を更に細めて、穏やかに言った。

「我等の技術は、目では盗めませぬ」

そして、ふと思いついたように、顔を上げて窓の外を見た。

太陽が遠くの山の頂に触れかけている。

「ちょっと失礼しますよ。』音合わせ』の時間ですじゃ」

そう言って、作業所に立て掛けていた馬頭琴を手に取り、窓から外に出て、外壁に突き出た椅子にトンと腰掛けた。

「………」

ナーガは黙って目を丸くしている。

老人は一息吸って、馬頭琴の弓を立てて、スウツと弾いた。澄んだ単音が谷に響く。

ほどなく、隣の尖塔から、別の楽器の音が流れて来た。隣の住民が奏でているのは横笛だが、それも同じ音程の単音だ。

途端、谷の各家から、様々な楽器の同じ単音が長く伸ばして聞こえて来た。

細い音、重い音、柔らかな音、刃え渡る音……。

それらは霧の谷に満ちてこだまする。

長い一音が終わって、老師が窓から室内に戻る頃には、夕陽は山に隠れていた。

「『音合わせ』……ですか？」

不思議な単音のハーモニーに心を奪われていたナーガは、我に返って聞いた。

「そうですね。楽器という物は奏で合わねばならぬ。別の楽器同士でも音が馴染まねば、それは音楽から遠退いてしまますのじゃ」

老師は馬頭琴の弦を外して作業台に寝かせ、微妙なラインを削りながら答えた。

この谷の特産品である、『風露(ふうろう)の民の楽器』が、他所で作られる楽器より、格段に素晴らしい音色がすると珍重されるのが、何となく分かった。こんなに丁寧な、音に魂を込めて造っているからだ。

これは見たからって真似できる代物ではない。この谷と、過酷な環境に甘んじる、彼等の誇りの成せる技だ。

ナーガは自分の思い違いを反省した。彼等は、追いやられたひ弱い民なんかじゃない。

フウヤがツタを滑ってやって来た。

老師の塔は少し高いので、ツタがたるんで途中で止まってしまっただが、子供は勢いを付けてぽおんと飛び移った。

ナーガは目が眩みそうにヒヤヒヤしたが、この子供には日常なんだろう。ナーガをチラと見てから、ラウ老師に寄って何やら耳打ちする。

「ほお……」

老師は優しい目になった。

「誰が言い出したねっ？」

「お姉ちゃんです」

「フウリか、二胡造りの……あの娘らしい思い付きじゃ。承知、と伝えなさい。後、各オオルグ長達にも、伝言を頼むよ」

何だか忙しそうだ。暇をいとまこいした方が良さそう。

「では、私はこれにて……」

ナーガは腰を上げようとした。

「まあ、お待ちなさい」

老師は奥から、古びた黒い馬頭琴を持ち出して来て窓を出た。先程の造りかけでなく、こちらは愛用品なのだろう。外の椅子に腰掛けて、ナーガを手招きする。言われるまま老師の横の窓枠に腰掛けた。

山は稜線に茜を残して、谷は藍色に沈みかけている。

「ほい、そろそろフウヤが回り終えた頃じゃ……」

老師は再び弓を立てて、馬頭琴を弾き始めた。

今度は単音ではない、……曲だ。もの悲しいが、美しい曲……

(聞き覚えがある……)

ナーガは、僅かな記憶を手繰りながら、静かに聞き入った。

いつの間にか、谷全体が同じ曲を奏でている。さっきの様々な楽器が見事に重なって、ひとつの曲を合わせ奏でているのだ。

それぞれの音が塔の間を竜のように走り、絡み合い、谷を駆け抜けて天に昇華する。

まるでこの世の物でないそのひとときに惹かれるように、背後の山から蒼い月が顔を出して部落を照らした。

演奏終わって、ラウ老師がナーガに向く。



「二胡造りのフウリと部落の若い者達が、ツバクロ殿の為に、一奏差し上げたいと申しましてな」

「……感謝します……」

胸一杯のナーガは、心から礼を言った。

「この曲は覚えがあります。幼い頃、父が、母の側でよく弾いていました」

「ああ……」

老師はこれ以上ない位嬉しそうに、頬を上げた。

「ツバクロ殿に馬頭琴の手解きをしたのは僕ですから。口説きたい女性がいるとか、臆面もなく、あの方は……」

薄暮(はくぼ)が過ぎ、家々にカンテラの柔らかない灯りがともされる。あの一つつの灯りの元で、木を削り骨を磨ぎ、真摯な手で優しい楽器が造り出されているのだろう。

帰り支度をして草の馬の腹帯を締めながら、ナーガはそっと振り向いた。

「あの…、父の馬頭琴…。多分この谷の出自品だと思うのですが…。すみません、処分せねばならなかったんです。黒死病患者の持ち物は皆…」

「…それは…哀しい事でしたな…」

ラウ老師は責めるでなく、ただただ哀しい顔をした。

「私個人として、新しい物を注文出来ますか？ ラウ老師のお造りになる馬頭琴……」

「ホホ…、僕の楽器は十年待ちですぞ」

「……………」

「急がれるのか？」

「母に…、聞かせたいのです」

叔父も馬頭琴を持っていた気がしたのだが、思い違いか家の物入れには見当たらなかった。西風の里に持って行って、置きっ放しなのかもしれない。

「部落の若い者の造る物で良ろしければ、そうお待ちしますませう」

「お頼みます」

「あの曲の譜もお付けしような」

ラウ師作のブランドにこだわらず、ただ純粹に馬頭琴を欲しがるナーガに、老師は最初よりほどけた表情で微笑み、両手を併せて一礼した。ナーガも礼を返して草の馬を上昇させた。

来た時馬を繋いだ山の斜面に降りて、今一度梯子を渡って関を訪ねる。一応、帰りの手続させねばならないのだ。

「あれ？」

建物から出て、カンテラで梯子を照らしてくれているのは、

風間の若者とは違った。

紫の髪がフワッと広がる、細身の女の口だ。髪の色よりやや薄目の藤色の衣装が、カンテラのおレンジに映えてきれいだな…、と思った。

「えと…、貴方が番人？」

女の口は顔を上げてナーガを見た。一重にスッと切れ込んだ瞳も、風露草(ふうろそう)みたいな紫だ。

ツタを渡って、カゴを下げたフウヤが来た。

「お姉ちゃん、夜食」

「あ、ああ…ありがと…」

呆けていた女の口は我に返って、横に退いてナーガを通した。

「じゃあ、貴方が、二胡造りのフウリ？」

姉弟というが、歳は大分離れているようだ。

女の口は小さく頷いて、顔を伏せたまま受付まで歩いて、分厚い名簿を開いた。風露の民の文字で書かれたナーガの新しい頁に、多分日付と、帰りの時刻が書き込まれた。

「ご苦労様でございました…」

フウリはやはり俯うつむいたまま、小さい声で言い、名簿を閉じた。

「あの…嬉しかったです、さっきの演奏。有難うございました」

「いえ…」

戒律厳しい部落の懐み深い女の口に、あまり話し掛けても宜しくないだろう。そう思って、ナーガは代わりにフウヤに「ッコリ微笑んで、梯子に向いた。

「お姉ちゃんー！」

フウヤが叫んだ。

「行っちゃうよ、このヒト！ わざわざ頼んで番人を代わって貰ったのに、いいの？」

「フウヤー！」

女の口はそれまで抑えてたモノが一気に溢れたように、慌てふためいて大声を出した。

「い、いいのよ、いいんです。さ、夜闇が静寂の魔を連れて来る前にお帰りにならないと。いいんです、お帰りになって…」

ナーガは肩を降ろして、梯子の所から踵を返した。

今日の任務はこれで終了だ。シンリイはエノシラが見ていくくれるし、少し位遅くなっても構わないだろう。

絶句している女の口の前を通り過ぎ、受付の名簿に手を掛けた。

「ね、これ、少し見せて頂けませんか？ 父の…足跡を、ちょっとだけ覗きたいんです」

「ツバクロさまだあー！」

向かいの山肌に降下して来る草の馬を見付けた最初の子供が叫んだ。

遠くの家々から伸びるツタを滑って、子供達が一斉に入り口の関に集まって来る。踏の葉の雨粒みたいた。

「大人気ですね」

受付で名簿を開く番人の横で、濃い縁取りの目の蒼の妖精は、ちよっと肩を竦めて苦笑いした。

「竹トンボ…！ 竹トンボの削り方、もういっぱい教えて！

上手く飛ばないの！」

「こないだの鞠つき数え唄…六つの次、誰も思い出せないの！ 何だっけ、ねえ、何だっけ?!」

あつと言う間に子供達に囲まれるツバクロの後ろで、番人が叫ぶ。

「こちらから、ツバクロ殿はラウ老師にご用なのだ。邪魔をしては駄目だよ」

「後でね、後で絶対だよ！ ツバクロさま！」

子供達の人垣を抜け出して、ツバクロは馬に跨がった。

「竹トンボは出来るだけ丁寧に薄く削るんだ。『六つ村雨七草

七夜』…続きは後でね」

空に舞い上がって老師の塔へ向かう前に、二回転宙返りのサービスも忘れないで子供達の大歓声を浴びるツバク口を、番人も浮き浮きした気持ちで見送った。

本当に、お陽様みたいなヒトだ。

「ここからも賑々しいのが見えました。ホんに子供達は貴殿が好きなのじゃなあ」

サオ老師は弦を依っていた手を止めて、奥の作業場から出て来た。弟子の少年がコ力茶を運んで来る。

「たまにしか来ないからですよ。美味しいトコだけ頂いて、申し訳なく思っています」

「いやいや……」

確かに当初、友好を結んだ蒼の里の外交官の青年が、部落の大人にいないタイプだったのに、老師は危うい物を感じた。門外不出によって保たれて来たこの部落の礎(いしずえ)が、子供達が外に興味を持つ事で崩れてしまうのではないか……と。

心配には及ばなかった。

この外交官は心得ていた。子供達に他愛ない遊びは教えたが、外の話は一切しなかった。馬に乗せてやれば大喜びさせてあげられるのは明らかだったが、その辺りはツバク口はしっかり線

を引いていた。

他の民族に自分達の価値観を押し付けられないのが、蒼の里の姿勢だ。分かなければ分かるまで努力すればいい。それでも分からなければ、分かれなさい、という事を自覚すればいい。

友好を結ぶのは、どんな形でもそれが糧と成るように……との願いからだ。

『目的』ではない。『願い』だ。その『願い』を胸に、ツバク口は月の半分を、諸外国を飛び回る。

サオ老師との話が終わり、関へ戻ったツバク口を、子供達が待ち構えていた。

「見て、ほら！ 竹トンボ！ こんなに飛ぶようになったよ」

「ねえねえ、また面白い唄、教えてえ」

「こっちが先だよお」

「おーい、みんな！ ツバク口殿は一人しかいないんだ。口々に喋るんじゃない！」

「大丈夫ですよ。今日はこの後予定がないので、子供達とのんびり遊んで行きますよ」

自分は特別凄い事を知っている訳でも、子供の機嫌を取るのが上手い訳でもない。風露の部落の子供達の日常に、あまりに刺激がなさすぎるんだらう。

しかし、哀れむのは違う。刺激的な日々を送る事が、豊かな人生とは言い切れない。この子供達は素晴らしい伝統と技術を継承して受け継いで行くのだ。大切に育まなくてはならない。

風露の子供達だけじゃない、どこの部族の子供だって、大きな流れの中で、各々の役割を担った大切な未来の紡ぎ手なのだ。

「あれ？ フウリがないね」

いつもツバクロの右斜め後ろを定位置にしていた女の子が、今日はいない。物静かで内気だが、ツバクロの言う事をひとつも聞き洩らすまいと、いつも黙って真剣に構えていた子だ。

「フウリは、弟子入りが決まったの」

「へえ、もうそんな歳だったけ？」

「うん、呑み込みが早いって誉められたの。先月、お母さんの所を出て、二胡造りのオルグに入ったの」

「そうか…、フウリ、器用だったもんな…」

楽器造りを学び始めると、正式な部族の一員だ。外へ出るのも、外の者と関わるのも制限される。

ツバクロは、まだ十分に幼い丸顔の、杏あんずみたいな頬の女の子を思い浮かべた。ワイワイ元気な子より、何かをシんと秘めた子供の方が気に掛かる性分なのだ。

「あれ、ツバクロさま、寂しいの？ フウリがスキだったの？」

「スキだったんだあ！」

「勘弁してくれ。もうすぐ娘に子供が生まれるんだ。そしたらオジイちゃんだよ、オジイちゃん！」

「オジイちゃん！ オジイちゃん！」

夕暮れて、子供達はツバクロに習った竹細工の蝶をヒラヒラ飛ばしながら、ツタを渡って家に戻って行った。

「さて……」

ツバクロは関の番人の方を見て、ウインクした。

「一局、行きましようかね」

番人は照れ臭そうに笑った。

小屋の中に、モンゴル将棋(シャタル)の盤が、しっかりと駒が並べられた状態でスタンバイされていた。

「今ん所の戦績は？」

「番人チームの三十六勝十四敗です」

「そろそろ本気出して行こうか？」

「本気じゃなかったんですか？」

二人、カンテラを灯して、駒を指し始める。

「フウリもその内、番人の役割が回るようになって、また会えるかな？」

「そうですね。今は修行が優先なのでまだまだ先ですが…。私も、弟子入りして貴方に会えなくなつた時、寂しかったですよ」

「ホント？」

「貴方はそうやって、沢山の子供を見送つて来たんですか？」

「そんな大層なモンじゃない」

「……………風露の部落って、正直、どうなんです？ 他所から見

たら、変ですか？」

「……………部族なんて千差万別で……………、僕にも基準なんて解らない。

風露の部族は……………」

「…はい…」

「好きだよ、僕は。尊敬している」

「……………有り難うございます……………王手」

「うわっ！ ちょっと待ってくれ！」

負け数をひとつ増やしたツバクロが関小屋を出る頃には、月

が中天に登っていた。番人の照らすカンテラの灯りを頼りに、

梯子を渡る。

「あれ？」

「(？)うっしました？」

「馬が…」

「……………はい……………」

「……………はい……………」

ツバクロは馬を繋いでいた場所の足元を調べている。

「どうしたっていうんです？」

「……………」

「助けを呼びますか？」

「……………」

「ツバクロ殿…………？」

「いや、大丈夫だ！」

ツバクロは両手を上げて、梯子を渡りかける番人を制した。

「多分、退屈して、自分で綱をほどいて散歩に行っちゃったん

だ。心配しなくていいよ、よくある事だから。足跡があるから

すぐ見付けられる」

「本当に…、大丈夫ですか？」

「ああ、だから、その梯子は渡るんじゃないよ」

「……………はい……………」

成人した風露の民は、掟で、部落の外へは出られない。

「下の谷の方へ行つたみたいだ。喉が渴いたのかもしいれないな。

僕は足跡を追って、馬を見付けたりそのまま帰るよ。じゃあ、

さよなら、またね」

「ああ…、はい。さようなら、お気を付けて……………」

番人は梯子の手前で蒼の妖精を見送った。

ちょっと慌て気味だったのに違和感を感じたが、愛馬に勝手されてしまった事の照れ隠しだったのかも知れない。風の末裔の乗馬の名手でも、あんな事あるんだな…。

ツバクロは足跡と、馬を繋いでいた所に漂っていた匂いを追って、夜の山道を急いだ。足跡は下っていたが、谷ではなく、山を回り込んだ風穴の岩場へ向かっていた。

空気が風穴の湿気を帯び、路の両側には夜露をまとった風露(ふうろう)の花が真っ盛りだ。案の定、月明かりに照らされた紫の群落の中に、夏草色の馬と…、小さな人影があった。

「やっぱり君だったか、フウリ」

この間まで子供だった少女が、首を下げた馬の横で、風露の花と同じ色の瞳で、ツバクロを見ていた。最後の記憶よりも顔がほっそりして、驚くほど大人びている。

「以前僕の馬の好物の話をした事があったからね。君はそんなに細な事も、ちゃんと心に仕舞っていたんだね」

少女の手には生姜の塊が握られている。馬はポリポリと音をさせて、夢中で生姜をむきほっていた。気難しい夏草色の馬だけれど、この好物にだけは屈服する。どこがそんなに美味しいんだ？　と思っただが…。

「何か、僕に用事があるのかい？」

ツバクロは出来るだけ優しく聞いた。

この少女は何重もの掟破りをしている。いい加減な子ではない。考え抜いた結果なんだ。思い詰めた表情が、それを語っている。

「…あの……」

少女は森の奥のフツポウソウよりも微かな声で言った。

「連れてって下さい…」

ツバクロが目を見開いて黙る。

「下働きでも何でもします。私を着の里に連れてって下さい…」

「…どうしてかな？」

ツバクロは動揺を抑えて、務めて優しく聞いた。自分まで通りの答えを返すと、この少女の心の持って行き場を塞いでしまう。

フウリは俯いて黙ってしまっただ。でも、震える手は、馬の手綱を固く握りしめたままだ。

ツバクロは肩を降ろして、辺りを見回した。風穴の入り口辺りに、乾いた平らな場所がある。

「その辺の、落ち枝を拾って」

「え……？」

「焚き火を起こそう。冷えるよと身体も口も固くなる。それに……」

素早く焚き火の土台を組みながら、少女の心細い顔を見た。

「風間見損ねた、君の杏あんずほっぺ、ちゃんと見たい」

小さな火が起こり、二人の手を暖めた。

「背が延びたね」

焚き火を挟んで差し向かいに座るツバクロに急に言われて、フウリははにかんだ。

「はい…、ちょっと…」

「蒼の里」に來たいの？」

「…はさ」

「風露の部落は、嫌い？」

「…いえ、嫌いって訳じゃ…」

「何か、嫌な事あった？」

「…いえ…」

ツバクロは困って言葉を途切れさせてしまった。少女は少女で、自分の気持ちを伝えようと一生懸命言葉を探している。

「…可能性……」

フウリはポツンと切り出した。

「うん…」

「可能性を、探してみたいんです、自分の……」

「可能性……」

「自分に出来る事は、本当に二胡造りだけなのか？ って……」

「……………」

それは、多かれ少なかれ、風露の若者の誰もが思っている事だろう。

「だから、私、二胡造りになるにしても、色んな可能性の中から選びたかったんです」

聡い子供だとは思っていた。だけれど、こんなに行動力があつたとは予想外だ。

「お願いしますっ」

少女は哀願の目で見つめて来る。

「ふうん…、分かった」

暫く考え込んでいたツバクロがポツリと言って、フウリは目を輝かせて顔を上げた。

その顔の横に、いつの間にか真ん前に来ていたツバクロの手が添えられた。

「僕と来るって事は、僕の言う事、何でも聞くんだよ？ 僕の命令には逆らえない？」

「……………」

「じゃあ、まず、何して貰おうかなあ？」

座ったまま硬直する少女に、蒼の妖精はスイト顔を近付けた。

「ツバクロ様…、そんなに私を連れてくの、嫌なんですか？」

フウリが、小さいが芯の通った声で言った。ツバクロは拍子抜けして後ろに下がった。

「ダメ…?」

「目が全っ然泳ぎまくっていますよ。私が泣き出して逃げ帰ればよかったですか?」

フウリはさっき手を添えられた頬に、自分の掌を当てた。

「ツバクロ様はどれだけ自分が好かれているか分かっていないんです。そっちの方が、ずうっと寂しいです…」

「……ごめん…」

この子は正直な思いを打ち明けてくれたのに、確かにこんな誤魔化しじゃ駄目だ。

「分かった」

ツバクロは立ち上がった。

「じゃあ、僕も君に、真実を教えてあげる」

「えっ?」

焚き火を始末して、一本の細長い薪を松明代わりに、蒼の妖精は少女の手を引いた。

「おいで…」

「私の本気、分かって貰えましたか? 私、例えツバクロ様が

連れてってくれなくても、部落に帰りませんから」

ツバクロの芝居を見破った事でちょっと自信を付けたフウリは、後ろで息巻いた。

ツバクロは黙って細い道を下って行った。やがて水音がして谷底近くに着く。足下の谷をえぐって深い河があり、その両脇の斜面に、壁のような柱が幾つもそそり立っていた。

「ここは…?」

「君達の住む塔の根元だよ」

「根元…」

たまに霧が晴れた時、下の河は見えたりするが、真下の根っこは見た事ない。…見ようと思った事もない……。

「こんな、太いんだ…? あれ…?」

石柱の周りを歩いたフウリは、異質な物に目を止めた。柱の周囲に、人工の石垣が積まれている箇所があるのだ。松明の明かりの中よく見ると、どの柱も人工の補強がされている。しかも新しい物だ。

「これ…、大人のヒト達がやっているの? 聞いた事ない…」

ツバクロはゆっくり言った。

「蒼の里で、請け負っているんだ」

「えっ…?」

「今日、ラウ老師を訪ねたのは、工事の経過を報告しに、なんだ」

「……………」

「この尖塔が、長年の侵蝕で出来た物っていうのは知っているだろっ？」

「はう…」

「侵蝕は止まる物ではない。ほんのちょっとづつ続いているんだ。長い歴史の上では、塔はいつか崩れて、部落は姿を消す」

「えっ！ ええっ！」

「すぐにじゃないよ。ずっとずっと…何百年も後だ」

ツバクロは動揺する少女の先回りしてフオーロした。

「だから、ずっと将来の、何代か先の子孫の為に、今、出来るだけその侵蝕を遅らせる工事しておくんだ」

「……………」

「皆に言つと、今のフウリみたいに動揺しちゃうから、老師と各オルク長しか知らない。この谷は霧がみんな覆い隠してくれてるしね」

「あの…」

フウリは自分の欲求は一旦忘れて、純粋な疑問を口にした。

「蒼の里の方々は…、何で、私達の為にそんな事をしてくれる

んですか？ 何か、契約を？」

「うん？ 契約とかじゃない」

「好意、なんですか？」

「それもちょっと違う」

「じゃあ、何で…」

「ああ、んーと…大切だから…？」

「……………」

「風露の里に受け継がれる技術と、あの谷でしか生まれられない技は、『大切』なんだ。誰にとって、とかじゃなく、とにかく大切なモノなんだ」

「……………」

「石垣作り、力仕事で結構大変だと思うだろう？ でも、里で、」

「この仕事は人気が高いんだ。何でだと思う？」

「…なんで？」

「たまに上から音が降って来る。音合わせや、演奏や。それを聞くと、自分達の護ろうとしているモノを、誇れるんだ」

「……………」

「無くしたら二度と戻らないモノなんだよ」

「……………」

「丁寧に積まれた石垣を指でなぞりながら、ツバクロは静かな

声で言った。

「でもやっぱり、工事をしても、いつかは風化して、塔は確実になくなる。いつの日かは、風露の里も今の楽器造りの技も、この世から消えてしまつ。その摂理には逆らえない」

「……………」

「長い長い谷の歴史の中で、風露の民がここに住むのはほんの一瞬なんだろう」

蒼の妖精は真っ直ぐ少女を見て微笑んだ。

「その一瞬に、君は存在する」

懐々とした瞳に、松明のオレンシが揺れていた。

「それで、私、部落に戻ったんです」

閑の小屋で、カンテラのおレンシに照らされながら、フウリは一息着いた。

「ツバク口様に風露の部落の運命を聞かされて…、自分の中で本当に大切なモノに気が付いたんです」

「…そう……」

ナーガもカンテラに照らされながら、静かに言った。

「父には分かっていたんですよ。貴方を引き取って面倒を見る事は出来るけれど、それは逆に、貴方の可能性を摘み取る事になる」と

「…はい…」

部落を出て雑多なモノを経験した自分は、多分、二胡造りには戻れなかったろう。例え戻っても、自分にとって元の風露の谷ではなくなっている。二胡造りの端くれになった今の身なら解る。

ナーガの繰ぐる分厚い名簿の父の頁は、その日の日付で途切れていた。それからすぐ後に、草原を災厄が覆ったのだ。

ナーガが今日風露の部落を訪れたのは、中途になっていた工事の再開の目処が着いた事を、老師に報告する為だった。

蒼の里も、漸く普請に人数を割ける体力を回復して来たのだ。

「ナーガさまあー」

家に帰した筈のフウヤが、ツタを滑って飛び込んで来た。

「ね、竹トンボ、上手く飛ばないの。風間の番人さんが、ナーガさまに聞いてみろって」

「フウヤ、もう寝る時間でしょう」

「だって、ナーガさま、明日はいないんだもん」

「貸してごらん」

ナーガは古い竹トンボを受け取って、カンテラの熱に当てながら少し角度を変えた。

「こういうの、父が一杯教えてくれたな…。修練所へ上がる前

の、本当に小さい頃……」

カンテラの灯りの室内を、竹トンボが真上にゆっくり飛び、フウヤが歓声を上げる。

そういえば、自分の子供時代だって、風露の子供達に負けず劣らず狭い世界だった。雪山の凍った神殿で、母と妹と、たまたに訪ねて来る父と叔父……。それで、十二分に幸せだった。

他人が見たら可哀想……と思えるかもしれないけれど、溢れるように幸せだった。風露の子供達だってそうなんだ。

ふ……と、風もないのに、竹トンボが横に流れて小屋の奥へ飛んだ。

「あ……」

フウリが小さく声を上げた。羽根が止まって落ちた所は、細長い包みの上だった。風間は、なかった物だ。

「お姉ちゃん、これ、さっき持って来た奴？」

フウヤが竹トンボを拾いながら包みに触れようとした。

「……！ フウヤ！ お休みの時間はとっくに過ぎてるわよ！」

「はあい」

爆発寸前の姉の気配を察して、子供はとっとと退散した。

残った大人二人……。

罰悪そうなフウリの横をすり抜けて、ナーガは惹かれるように包みに近付き、手に取った。

「これ……？」

「あの……、あの……」

フウリは俯いて迷いながら小さい声で言った。

「私が初めてちゃんと仕上げた製品を……、ツバクロ様が真っ先に注文するよって、言ったださって……。それで、子息様がいらしたと聞いて、仕舞っていたのを引っ張り出したんです。でも……」

「開けていいですか？」

返事も待たずにナーガは結び目に手を掛けた。

フウリはオロオロと言いつくをする。

「久し振りによく見ると、未熟な品で……、それに貴方は馬頭琴を注文されたというし……、そちらの方が……」

モスリンの柔らかい包みの中から姿を現したのは、柄が長目で少しバランスが悪いけれど、美しい曲線の二胡だった。手足の長い父の身体に合わせようと、試行錯誤したのかもしれない。弦の調節棒に、黒地にオレンジで、風を表す螺鈿模様が施されている。父のストールと同じ色……。

ナーガは黙ってその二胡を凝視した。



「…恥ずかしいです…、あちこち手が足りなくて…」

「これ…、譲って下さいますか?」

慌てる娘の声を遮って、ナーガは続けた。

「父の…持ち物は皆、焼かねばなりませんでした。形見が何も
ないのです。これこそ、父の、遺した、立派な、大切な、形見
です」

フウリは何か溢れるのを受け止めるように、両手を口に当
てた。

「勿論、対価はお払います」

「対価は…、もう、頂いたんです…」

「…え…」

「あの夜…」

「二胡って弾いたことないんです」

帰る際、梯子の手前でナーガが照れ臭そうに振り向いた。

「…ていうか、音楽のたしなみが全くないのです」

カンテラを掲げるフウリがちょっと微笑んだ。

「聞く心もたしなみの内です。ナーガ様は十分にお持ちです」

「二胡…、教えて頂けますか?」

「……私が、番人の日になら…」

蒼の妖精は蒼い月を背景に舞い上がった。

真摯な手で造られた優しい楽器は、野に降り、真摯な心を地
に広げる。その音色は上下の手により音楽に紡がれ、やがて幾
百の安らぎを生み出す。

くおしまい